

# 「野口英世アフリカ賞」の運営の 改善に向けた有識者懇談会報告書

令和2年12月18日

「野口英世アフリカ賞」の運営の改善に  
向けた有識者懇談会

# 『「野口英世アフリカ賞」の運営の改善に向けた有識者懇談会』報告書

## (目次)

はじめに .....	2
1. 指摘されている野口賞運営における問題点 .....	3
2. 「公募方法の改善」 .....	3
(1) 英語圏以外のアフリカからの推薦の不振 .....	3
(2) 過去の優秀な推薦者の再推薦 .....	4
(3) 推薦分野の適切な選択のための調整 .....	4
(4) 個人候補と団体候補の扱い .....	5
(5) 推薦フォーム .....	5
(6) 推薦にあたっての新型コロナウイルス感染症への考慮 .....	5
3. 「推薦委員会委員・プロセス・基準」 .....	6
(1) 推薦委員会委員の出身母体 .....	6
(2) 推薦委員会における受賞候補者リストの順位付け .....	6
(3) 推薦対象分野の多様化 .....	7
(4) 今後の活動のインパクトの項目を推薦フォームに入れるべきかどうか .....	7
(5) 野口賞委員会及び推薦委員会委員の公表のあり方 .....	8
(6) 新型コロナ・ウイルス感染症の拡大の下での野口英世アフリカ賞委員会、推薦委員会 の活動のあり方 .....	8
4. 「広報の強化」 .....	8
5. その他の提言 .....	9
(1) 「ヤング・ノグチ賞」(仮称)の創設 .....	9
(2) 日本企業・組織による支援との連携 .....	9
(3) 日本人専門家の良い慣習と規律を学ぶ機会に .....	9

## はじめに

野口英世アフリカ賞（以下「野口賞」と略）は、2006年5月に小泉純一郎内閣総理大臣（当時）が、アフリカ・ガーナを訪問した際に着想し、同年7月に閣議決定によって創設された。本賞は、「感染症の蔓延が人類共通の危険であるとの認識に立ちつつ、特に問題の解決が求められている地域であるアフリカでの感染症等の疾病対策のため、医学研究又は医療活動分野において顕著な功績を挙げた者を顕彰し、もってアフリカに住む人々、ひいては人類全体の保健と福祉の向上を図ること」を目的としている。

2008年5月、第4回アフリカ開発会議（以下「TICAD」と略）において、第1回野口賞が、医学研究部門は英国のブライアン・グリーンウッド・ロンドン大学熱帯衛生医学学校教授に、医療活動部門はミリアム・ウェレ・ケニア国家エイズ対策委員会委員長（当時）に授与された。爾来3回にわたり野口英世の意志を継ぐ6人の泰斗に授与されている。いずれの受賞者もアフリカの医学・医療分野では知らぬ者はいない方々である。

野口賞は、5年毎に日本で開催されるTICADにあわせて授与されてきたが、2013年の第5回TICAD（第2回野口賞授与）の後、アフリカと日本で3年毎に交互に開催されることになったため、第3回野口賞は6年後の昨年8月の第7回TICADで授与された。野口賞は、アフリカの医学・医療に特化した国際賞で、副賞も1億円というノーベル賞に匹敵する額ということもあり、日本国内においても国際的にも注目される賞である。一方、5年ないし6年毎の授与頻度では、国際的な認知度が低くなってしまう可能性も指摘され、安倍晋三内閣総理大臣（当時）は、第3回野口賞授賞式において、第4回以降の野口賞はTICADの開催周期に合わせ3年毎に授与する旨発表された。

今般、この決定を受け、第1回野口賞授与から10年以上経過したこともあり、野口賞の運営全体の改善をはかるための有識者懇談会の設置が決定された。懇談会は本年7月16日に総理官邸で安倍晋三内閣総理大臣、菅義偉内閣官房長官（いずれも当時）の出席を得て第1回を開催し、計3回にわたり議論を重ねた。

第1回懇談会の挨拶において、総理から「野口英世アフリカ賞が、アフリカの自主性を尊重し、日本を含む国際社会の協力を推進するというTICADの理念を体現する重要な象徴としてアフリカの未来を照らし続ける。」と述べられた。また、昨今の新型コロナウイルス感染症に関する状況は、全世界の人々の脅威であり、「アフリカに住む人々、ひいては人類全体の保健と福祉の向上」を目指す野口賞の重要性を改めて認識する機会にもなっている。ここに本報告書を提出し、アフリカ、さらには全世界の保健と福祉の向上にいささかなりとも貢献することを期待する。

## 1. 指摘されている野口賞運営における問題点

これまでの3回の野口賞の選考過程の中で、推薦委員会の委員を務めた方々から、運営に関する課題として、「公募方法の改善」、「推薦委員会委員・プロセス・基準」そして「広報の強化」の3つの分野について意見が寄せられた。

まず、「公募方法の改善」については、の5つの論点が指摘されている。

- ① 英語圏以外の国からの推薦が不振であること
- ② 過去の選考過程で各分野の上位3位までに入った優秀な受賞候補者が、次の回の賞で推薦されていないこと
- ③ 被推薦者の推薦分野の適切な選択のための調整
- ④ 被推薦者における個人と共同研究者・事業団体の扱い
- ⑤ 推薦フォーム

次に「推薦委員会委員・プロセス・基準」について、5つの論点が指摘されている。

- ① 推薦委員会委員の出身母体
- ② 推薦委員会における受賞候補者リストの順位付け
- ③ 今後の活動へのインパクトを推薦フォームの項目に入れるべきかどうか
- ④ 推薦委員会委員の公表のあり方
- ⑤ 新型コロナウイルス感染症の拡大の下での推薦委員会の活動のあり方

最後に、「広報の強化」について、アフリカ、特に国の数が多い仏語圏での広報の拡充が重要との指摘がある。また、日本国内における野口賞の広報・周知をどのように図るかが課題と指摘されている。

以上3つの分野について有識者懇談会で議論した。それぞれの分野における課題の＜問題の背景＞と、それに対する＜提言＞を以下の通りまとめた。

## 2. 「公募方法の改善」

### (1) 英語圏以外のアフリカからの推薦の不振

＜問題の背景＞

英語圏以外のアフリカからの推薦が不振である。その理由の一つとして、推薦募集要項等が英語のみであることが指摘されている。英語圏以外、特に国の数が多い仏語圏アフリカからの推薦を促進するため、推薦募集要項の仏語編集、仏語による推薦書類の提出を受け付けることが可能かを検討する。

#### <提言>

・英語圏以外、特に国の数が多い仏語圏からの候補者が少ないことについて、改善が必要であるとの認識は一致した。仏語による推薦書類の提出については、医学研究分野と医療活動分野で対応が異なって良い。

・医学研究分野に関しては、医学研究者は英語圏以外の出身者であっても一般的に英語での論文執筆等に問題がないので、英語による推薦書類の提出で構わないと考える。当該分野の仏語圏アフリカからの被推薦者を増加させるには、同地域における野口賞の広報強化が必要である。

・一方、医療活動分野については、医療活動がコミュニティベースの活動に基づいているので、言語的要素が重要である。したがって、国の数が多い仏語圏アフリカで活動している被推薦者の推薦書類は、仏語での提出を可能にすることを提言する。また、医学研究分野と同様に野口賞の英語圏以外のアフリカにおいても広報活動の強化が重要である。

### (2) 過去の優秀な受賞候補者の再推薦

#### <問題の背景>

第1回・第2回野口賞の選考過程で最終的な受賞候補者リストに入りながら、惜しくも受賞できなかった優秀な候補者が、第2回・第3回野口賞で推薦されていなかった。このような候補者の扱いを考える必要がある。

#### <提言>

・多くの国際賞で、以前推薦されたが受賞できなかった候補者の再推薦は普通に行われている。過去に推薦されているが受賞していない者が再び候補者になるようなメカニズムが必要である。

・推薦された者を次回以降の選考作業に加える旨推薦要項に記載し、併せて、過去の被推薦者で優秀な者を再度推薦するように促すことを提言する。

### (3) 推薦分野の適切な選択のための調整

#### <問題の背景>

被推薦者の推薦分野に関しては医学研究分野と医療活動分野の二つがある。この分野の指定について、推薦者と推薦委員会との間で判断が異なる場合がある。優秀でありながら、推薦者による分野選択が適切でないという理由で当該被推薦者を選考対象から落とすのは不合理だとの見解がある。推薦分野の選択が適切でなかった場合の調整方策が求められる。

#### <提言>

・推薦された分野が適切でないと考えられる場合、事務局が適切な分野に振り替えるか、医学研究分野と医療活動分野の推薦委員会の二人の委員長の間で適切ではない選択がない

か協議し、二人の委員長が合意に達しなかった場合には野口英世アフリカ賞委員会（以下「野口賞委員会」と略）の委員長に諮り、選考過程に入る前に、被推薦者が適切な分野に振り分けられるように調整することを提言する。

#### （４）被推薦者における個人と団体の扱い

##### ＜問題の背景＞

個人と共同研究者・事業団体の扱いについて、推薦者が個人を推薦したとしても、被推薦者個人の業績が共同研究者や被推薦者の所属する事業団体によるところが大きい場合もある。実際の推薦にかかわらず、受賞者候補に共同研究者も含めるべきとの意見や、被推薦者の所属する事業団体を受賞候補に差し替える方が望ましいとの意見もある。

##### ＜提言＞

- ・医療活動分野は団体の推薦が可能になっており、団体は数か国に及んで活動していることもあるので、そのような団体が受賞すれば、活動の内容だけではなく、広報的にも効果があると考えられる。
- ・医学研究分野については、研究業績に対する評価は、ノーベル賞の例もあるように、研究者個人にある（場合により共同研究者）ことが通例である（ノーベル平和賞だけは団体となることがある）。そのため、上記のように団体が受賞することは想定していないと考えられる。

#### （５）推薦フォーム

##### ＜提言＞

- ・推薦者は、推薦にあたり野口英世の功績を参考にすることから、野口英世の功績が直ちに理解できるように、簡単で分かりやすい資料を英語、仏語、アラビア語、ポルトガル語、スペイン語で作成し、推薦要項（英・仏語で作成）に添付することを提言する。
- ・医学研究分野で採用されているように、医療活動分野においても推薦フォームがウェブサイトに取り込まれ、電子データで送信して推薦できるようにすることを提言する。

#### （６）推薦にあたっての新型コロナウイルス感染症への考慮

##### ＜提言＞

- ・新型コロナウイルス感染症の影響がアフリカでも非常に大きい。アフリカでこのような新しい感染症に立ち向かっている研究者や現場の医療活動家について、世界保健機関（World Health Organization：WHO）、WHO Regional Office for Africa（AFRO）、アフリカ疾病予防管理センター（Africa Centre for Disease Control and Prevention：アフリカCDC）、在アフリカ日本大使館等の機関を活用して発掘し、推薦者数が増加す

ることを期待する。

・他方、新型コロナウイルス感染症はアフリカにおける疾病の一つでしかないことも事実であり、野口賞を新型コロナウイルス感染症だけに限るべきではない。

### 3. 「推薦委員会委員・プロセス・基準」

#### (1) 推薦委員会委員の出身母体

<問題の背景>

WHOや独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency: JICA）の現役の職員が、野口賞の推薦過程や選考過程に関与することについての是非が問われている。当該機関の職員が推薦やサポートレターを出すという関与を排除すべきだとの見解がある一方、当該機関の職員が推薦委員会に参加するなど、一定の範囲内で選考過程に関与することを認めるべきだとの見解もある。第3回野口賞の医療活動分野推薦委員会では、JICAの職員が所属組織を代表するという立場ではなく、あくまでも個人の立場でアフリカの保健事情に関する知見を活かすという立場で、選考作業に参加していた。WHO・AFROからも、同機関でアフリカの医学研究や保健事情に詳しい職員を、個人の立場として選考作業に参加させたいとの意向が表明されたこともある。

<提言>

・WHOは保健衛生の分野で重要な役割を果たしており、政治的な組織でもある。WHOの現役の職員が推薦委員会に入ることは、委員会の中立性に影響を与える可能性を払拭できない。JICAやその他の主要国の援助機関、国際機関の現役の職員もWHOと同様の懸念がある。他方で、過去の推薦委員会にはJICA、国連合同エイズ計画（Joint United Nations Programme on HIV/ AIDS : UNAIDS）、世界銀行、WHO、AFRO等の機関の出身の委員が存在した。国際保健分野で活動する有識者の中には、これら公的機関と何らかの関係を有し、いくらかの手当を受けている者も多い。少しでも関係がある者を委員から排除することは、推薦委員会の質の確保に困難をきたすこともありうる。従って、利益相反を防ぐために、推薦委員会委員の選択基準として、JICAなどの日本政府の関係機関やWHO等の国際機関の現役、かつフルタイムの職員であるか否かを基準とする（何らかの手当を当該機関から支給されていてもフルタイムの職員でなければ推薦委員会委員の就任を認める）ことを提言する。

#### (2) 推薦委員会における受賞候補者リストの順位付け

<問題の背景>

これまで、医学研究分野及び医療活動分野の両推薦委員会（以下「子委員会」と略）が野口賞委員会（以下「親委員会」と略）に提出する受賞候補者3名のショートリストにつ

いては、それぞれ順位が付されてきた。しかし、順位付けは主観的かつ複雑な作業であり、順位が付されると親委員会における自由な選考審議を妨げるとの問題が指摘され、今後は順位を付さないようにすべきとの意見が提起された。他方、各子委員会の能動的な活動を担保するために、受賞候補者リストに順位を付すことは重要との意見もある。

<提言>

・親委員会が最上位にあり意思決定する機関であるので、親委員会は子委員会の候補者の推薦理由をもとに自由に独自の見識を発揮することができるよう、各子委員会では上位3人（件）程度に順位をつけずに、受賞に値する候補として推薦することを提言する。順位付けしないことが各子委員会のやる気を喪失させることにはならないと考える。

### **（3）推薦対象分野の多様化**

<提言>

・これまでの受賞者は、感染症、プライマリヘルスケアなど伝統的な分野が多い。今や、データヘルス、病院経営、保険など、大勢の人が裨益する新しい研究や活動が増えている。新型コロナウイルス感染症の問題で明らかになったように、今の世界の保健問題は、単に生医学だけではなく、様々な領域に関係する。そのような視野に立った推薦が出ることを期待し、推薦委員会も多様な領域の者が入ることを期待する。

### **（4）今後の活動のインパクトの項目を推薦フォームに入れるべきかどうか**

<問題の背景>

授賞が受賞者の今後の活動にいかなるインパクトをもたらすのかを問う項目（約200語）を推薦フォームに加えることの是非について、次の二つの意見がある。

- ① 推薦者は、授賞が被推薦者の活動をより一層促進するであろうということを具体的にアピールすべき。
- ② その回答は推薦者の主観的な考えであって、それが被推薦者の考えと一致するか、受賞後の被推薦者の活動を保証することにならないのではないか。

<議論の結果>

以下の通り有益、不要の2論が出た。議論の結果、将来のインパクトについては記載不要となった。

・今後の活動、将来のキャリアのビジョン、ないし、やるべきことを推薦フォームに記述することは、過去だけではなく、現在進行中の活動も考慮して賞が授与されることから重要である。将来の活動のインパクトを記載するには推薦者と被推薦者の関係が緊密でなければできない。この項目を入れることで推薦者と被推薦者の関係性が明らかになるという長所がある。

・今までの全ての受賞者は野口英世及びこの賞の偉大な広報大使になって活動している。従って、将来の活動について記述する必要性は見えない。被推薦者が受賞後どのような活動をするかを見通すことは推薦委員会の見識にかかっている。将来の活動のインパクト以上に、過去の功績が重要である。今までの受賞者は業績も将来のインパクトも十分に知られた人物であった。

#### (5) 野口賞委員会及び推薦委員会の委員の公表のあり方

##### <問題の背景>

野口賞委員会及び推薦委員会委員の公表については、委員委嘱中は外部からの選考過程に対する影響を避けるとの観点から、公表を避けていた。授賞式後は、これらの委員は任を解かれるので、その時点で、委員であったことを問われれば公表できるようにすべきだとの意見がある。

##### <提言>

・受賞者に関し質問される可能性があることから、医学研究分野と医療活動分野の両推薦委員会の委員長、野口賞委員会委員長は授賞式後公表することを提言する。

#### (6) 新型コロナウイルス感染症の拡大の下での野口賞委員会、推薦委員会の活動のあり方

##### <問題の背景>

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、委員会の委員が訪日して議論することが不可能な場合もあることを念頭に、「新しい日常」の中での委員会の活動につき検討した。

##### <提言>

・新型コロナウイルス感染症の状況によっては、委員のアフリカ、または、日本への移動が困難となる。その場合は、委員会自体も必然的にオンライン方式で行わざるを得ない。アフリカ内外の移動が可能な地域・国があれば、ハイブリッド方式（対面及びオンライン方式の混合）で行うことも可能である。しかし、オンライン方式だけに頼るのは通信状況によっては問題が生ずる。まずは、今後の状況を見つつ、柔軟に対応することを提言する。

#### 4. 「広報の強化」

##### <問題の背景>

野口賞のアフリカにおける広報は、野口賞候補の推薦数に直結するとともに、野口賞の価値を高めることとなる。また、日本国内の広報も重要である。野口賞の賞金の半分は募金によるものであることから、国内広報活動は募金活動にも直結する。

## <提言>

- ・英語及び仏語の様々な科学誌、公衆衛生専門誌、一般誌、さらにはアフリカにおいて広く支持されているソーシャルメディアにより広く広報することが不可欠である。
- ・広報活動を強化する際に、「日本のアフリカに対する行動」という観点が重要である。日本政府がアフリカにフォーカスした科学的国際賞を創設したことは大きな動きであり、アフリカを大いに勇気づけるものであった。野口賞は、日本のアフリカに対する行動を日本国内とアフリカの双方に広く知らしめるよい機会である。
- ・在アフリカの日本大使館、JICA事務所、関連する国際機関等による、さらに積極的な広報活動を提言する。
- ・同時に、受賞者を介して国内で広報活動をすることも重要である。（第1回野口賞医療活動部門受賞者で本懇談会の委員でもあるウヰレ教授は、2011年に東日本大震災後自費で福島を訪問し、現地の方々と交流し、大きな成果をあげた。）
- ・IT企業も関連させ、薬剤、医療機器など民間の保健衛生業界への野口賞に関する情報提供は候補者の推薦につながる。日本、アフリカそして国際的な市民社会団体、NGOへの広報も有効である。

## 5. その他の提言

### (1) 「ヤング・ノグチ賞」(仮称)の創設

- ・これまで業績があった人に賞を与える野口賞に加えて、若い世代向けの「ヤング・ノグチ賞」(賞金は高額である必要はなく、「ジュニア・スカラシップ」といった奨学金の形でよい。)の創設を提言する。野口賞が授与されない年に授与し、野口賞の登竜門と位置づけてはどうか。
- ・チュニジアで開催される次回TICADに、将来野口賞の受賞者になれるような若者を招待することを提言する。

### (2) 日本企業・組織による支援との連携

- ・野口賞を通じて、日本企業等がアフリカにおけるプログラムを支援することを提言する。具体的には、日本企業、政府機関、NGO等が野口賞受賞者の取り組みを支援することを期待する。

### (3) 日本人専門家の良い慣習と規律を学ぶ機会に

- ・アフリカ人が日本で大きな感銘を受けるのは、日本人の労働規律のような行動と慣習、仕事への献身的な取り組み、他人を蔑まないことなどである。野口賞受賞者と連携したプログラムやプロジェクトに、日本とアフリカの専門家がアフリカの若者や若年層とともに参加し、日本とアフリカのパートナーシップを形成し、その中で良い慣習と規律の文化やアフリカへの献身がアフリカ人に伝わり、アフリカの若者の中にこれらの価値観が醸成さ

れていくと考えられる。日本政府、経済界等に、こうしたプログラムやプロジェクトへの協力、後押しを期待する。

(以上)